

岡山県南部における南海地震の記録

—昭和南海地震・安政南海地震—

岡山県備前県民局

発刊趣旨

東南海・南海地震は、国の予測では今後30年以内に50～70%の高い確率で発生するとされており、岡山県においても建物被害の予測数値や震度分布、液状化危険度分布、津波予測等の調査結果を公表している。

ところで、東南海・南海地震は、過去おおむね100～150年の周期で発生しており、近くは、1946年（昭和21年）の昭和南海地震、さらに遡れば、1854年（安政元年）の安政南海地震があるが、両地震の被災状況等については、わずかながらも自治体史や行政文書、あるいは、古文書に記録が残されているものの、これらを集約編纂した刊行物はない。

今後、東南海・南海地震対策を講ずる上で是非とも必要なことは、それぞれの地域の具体的な被害想定を行うことである。そのためには、公表されている各種の調査資料やハザードマップに加え、過去の地震記録により各地域で実際に起こった被害の状況、程度、範囲等を知ることが肝要である。そこで、文書に散見する昭和南海地震と安政南海地震の記録をとりまとめ、被害状況を検証することも意義あることと考え、本冊子を発刊する次第である。

なお、編集にあたっては、被害の大きかった県南部を対象とし、また、「岡山県に被害をもたらす主要な要因は土地の液状化である」との観点からその被害状況を中心に検証するとともに、地震発生時に数分間も続く強い揺れや津波の発生等の東南海・南海地震特有の事象にも焦点をあてた。

本冊子が、行政、企業、自主防災組織をはじめ県民の皆様に幅広く御活用いただき、東南海・南海地震対策推進の一助となれば幸いである。

平成19年 5月

岡山県備前県民局

目 次

I 東南海・南海地震について	1
1. 地震の概要	1
2. 東南海・南海地震が岡山県に及ぼす影響	2
II 南海地震の記録	4
1 昭和南海地震	4
1. 発 生	4
2. 震 度	5
3. 岡山県の被害概要	5
4. 被害発生原因（液状化と地盤沈下）	7
(1) 液状化と地盤沈下の関係	7
(2) 地盤沈下の状況	7
5. 津 波	10
6. 岡山県内の被害状況	10
(1) 被害状況の概要	10
(2) 被害状況の詳細	12
2 安政南海地震	19
1. 発 生	19
2. 震 度	19
3. 津 波	19
4. 余 震	20
5. 被害状況	20
6. 資 料	21
南海地震が記載されている図書等一覧	29

I 東南海・南海地震について

1. 地震の概要

○駿河湾から四国沖の太平洋沿岸部に、連続した3つの震源域があり、マグニチュード（略称「M」）8以上の巨大地震を周期的に発生させている。

それが海溝型地震としての東海地震・東南海地震・南海地震である。

※地震には活断層型と海溝型がある。活断層型（例：阪神・淡路大震災）は最大でもM7クラスで被害範囲は狭い。それに対し海溝型はM8以上と巨大で被害範囲が非常に広域である。

○3つの地震の発生は強い連動性があり、歴史上、同時もしくは連続して数多く発生している。特に東南海地震と南海地震については、次回の発生では地震が同時に起こる可能性が予測されていることから、現在、2つの地震を1つの地震としてとらえ「東南海・南海地震」として一括した調査研究が行われている。

○「東南海・南海地震」については、国の中央防災会議（会長：内閣総理大臣）が、平成13年から専門調査会を設け調査研究を行っている。次回地震の想定概要は、次のとおりである。

（東南海・南海地震同時発生時の想定概要）

① 地震規模＝マグニチュード8.6

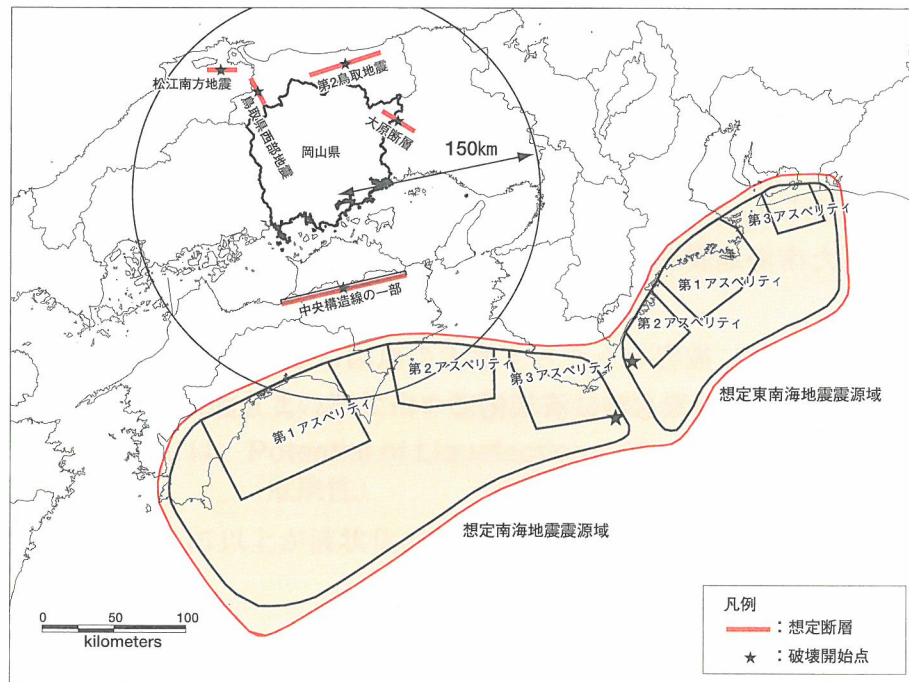
※マグニチュードは、0.2上がるとエネルギー規模が2倍になる。M7.0とM8.0の間は32倍。東南海・南海地震のM8.6は、阪神・淡路大震災のM7.3の約100倍の大きさとなる。

② 30年以内の発生確率＝50～70%

※個別の発生確率：東南海地震＝70%、南海地震＝50%

③ 被害想定＝被害範囲は21都府県に及び、経済的損失は57兆円

※経済的損失：東海地震＝37兆円、阪神・淡路大震災＝10兆円



2. 東南海・南海地震が岡山県に及ぼす影響

(1) 地震による現象

- ① 県南部で震度5強～6弱の地震動がある。
- ② 県南部の干拓地・埋立地及び河川流域の沖積層で液状化が広範囲に発生する。
- ③ 瀬戸内海沿岸部に津波（最高3m）が襲来する。
- ④ 山・崖崩れが発生する。

(2) 地震による被害想定

- ① 液状化により建築物・道路・堤防・ライフラインが破壊される。
- ② 火災が発生し市街地では延焼する。
- ③ 海岸部・河川流域の低地では、津波の力により、建築物・堤防等が破壊される。
- ④ 斜面被害（土砂災害）が発生し、建築物が破壊され、道路・鉄道が寸断される。

【岡山県の建物被害（大破・焼失）棟数想定】

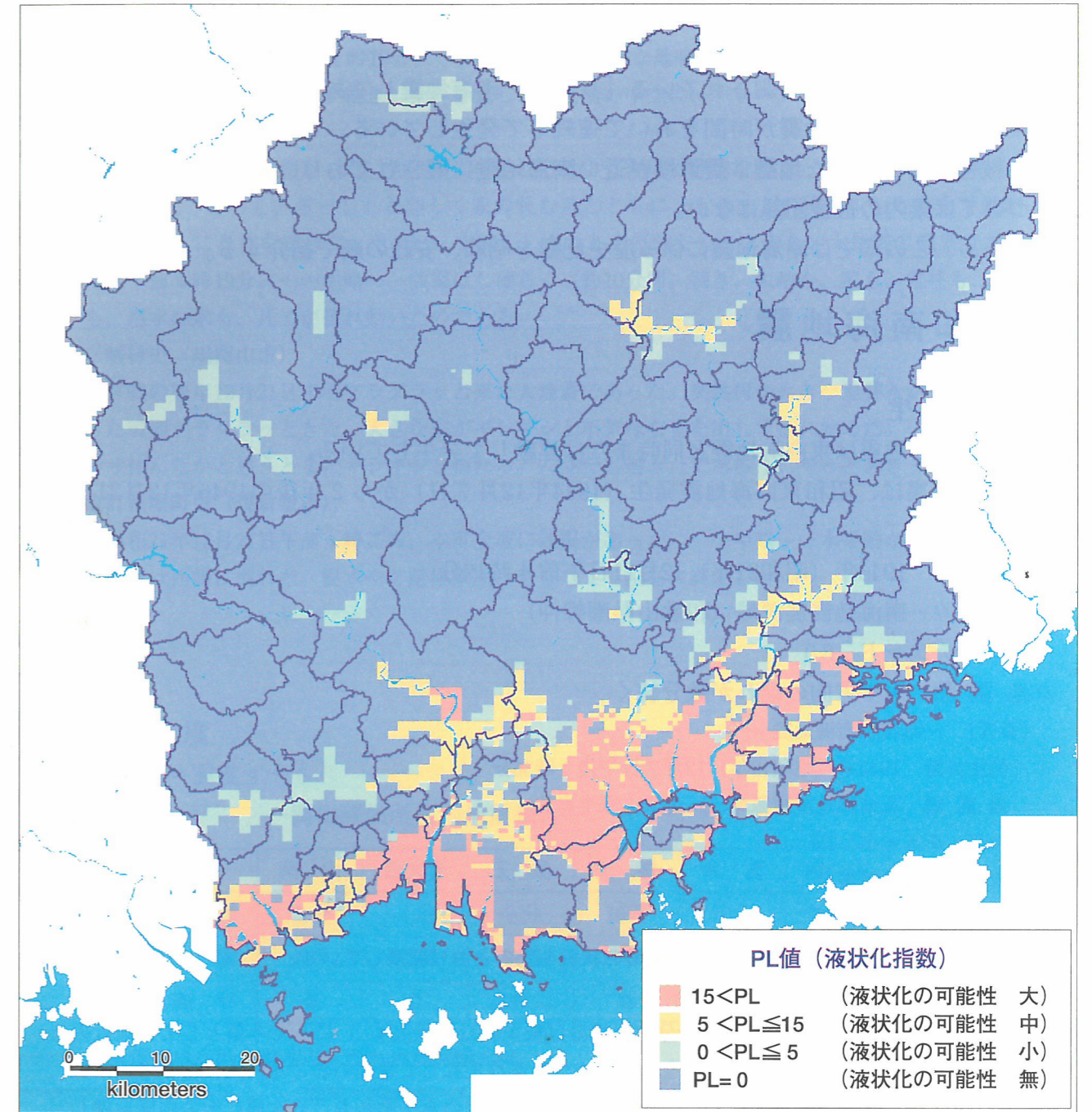
振動・液状化被害	火災被害	津波被害	斜面被害
8,819棟	86,668棟	約800棟	約500棟

※上記の大破・焼失棟数想定の中で、振動・液状化被害及び火災被害は、岡山県調査数、津波被害及び斜面被害は、中央防災会議調査数を使用
火災被害については、冬の17時から19時に平均風速8m/秒で想定

(留意事項：岡山県南部平野の液状化)

- 「東南海・南海地震」により岡山県南部は、震度5強～6弱の地震動が発生する。しかし、震度6弱では大半の建物は倒壊しない。
岡山県南部に著しい建物被害をもたらす最大の原因は、地震動による土地の液状化であり、それに長時間の強い揺れが加わって、建物が倒壊する。
- 液状化は、①干拓地・埋立地または河川沿いの沖積層等の地盤が軟らかい土地、②地下水位が高い場所と、2つの要件が重なって発生する。
- 岡山県南部平野のほぼ全域は、河川による沖積層と干拓地・埋立地で形成されており、液状化の危険性が極めて高く、岡山県は調査結果（平成14年度）を基に「液状化危険度分布図」（P.3）を作成し公表している。
また、過去発生した南海地震の記録にも県南各地での噴水や噴砂等の液状化現象が記述されている。
- 従って本冊子は、岡山県に被害をもたらす最大の原因は土地の液状化にあるとする観点から編集し、過去の地震記録の中でも特に液状化については、より詳細に記載することとした。

(参考) 東南海・南海地震に係る液状化危険度分布図



(注) PL値 = その地点での液状化の危険度を表す数値
PLは、Potential of Liquefactionの略。
(危険性) (液状化)
PL15以上が液状化の危険度が高いとされている。

Ⅱ 南海地震の記録

同時に起こる可能性が予測されている「東南海・南海地震」であるが、昭和と安政の地震では、東南海地震と南海地震が時間をおいて連続して発生している。これらの地震のうち、岡山県内に被害をもたらした地震は震源域に近い南海地震に限られており、震源域が遠い東南海地震については県内の被害記録はない。

このため、この章では南海地震に係る歴史記録を昭和、安政の順で紹介する。

1 昭和南海地震

1. 発 生

歴史上、南海地震は東南海地震と同時または連動して発生している。

昭和南海地震は、昭和東南海地震発生（1944年12月7日）から2年後の1946年12月21日に発生した。

○発生日時 1946年（昭和21年）12月21日午前4時19分

○地震源 南海地震震源域（和歌山県潮岬沖）

○マグニチュード 8.0

○地震動 水平方向の揺れが数分続く

（参考）—昭和東南海地震—

発生日時 1944年（昭和19年）12月7日午後1時36分

地震源 東南海地震震源域（三重県志摩半島沖）

マグニチュード 7.9

※岡山県内の被害なし

岡山測候所（現岡山地方气象台）は、発生時の状況を次のとおり記録している。

発震当時の当所の模様

本震の岡山の発震時は午前4時19分（地震計は戦災のため焼失す。）にして本県としては最近の地震史に未だかつてない稀有の地震なり。岡山は中震程度にして地震のおこる前大体南東方向に大砲の音のごとき地鳴りを聞き間もなく割合に緩やかな南北の水平動がおこり次第にその強度を増し約5分間に亘り激動す。地鳴りは約1分間程度にて終わる。なお発光現象は観測せず。振動状態はいわゆる海底地震型にて振動方向は大体南北動なり。このため震源地は海底と推定す。当時の観測者のいた当直室は壁に亀裂を少し生じた程度にしてその他ほとんど被害なし。しかし電灯は地震と同時に各所でスパークをおこし停電す。また電信、電話も不通となる。

岡山測候所「昭和21年12月21日地震調査記録」地震報告（12月26日付け）

○海溝型巨大地震は、広い震源域を有し、そこから発せられる地震動は長時間継続する。このことが南海地震発生時の大きな特徴であるが、市町村誌等には次のように記載されている。

発生時の状況

○改訂邑久郡史（現瀬戸内市・岡山市の一部）

21日午前4時19分56秒より約10分間水平に震動す。

○幸島新田開拓三百年記念誌（現岡山市）

昭和21年12月21日午前4時19分、……中略……無気味な地鳴りとともにはげしい上下動を感じ、家のきしむ大きな横ゆれが続き、全戸停電したほの暗い中空に、パッパッと青白い閃光が走る。

○操陽村史（現岡山市）

冷え込みのきつい朝だった。大半の人はまだ心地よく寢床で夢路をたどっていたところである。突然だった。「ぎっし、ぎっし」と烈しく家の軋む音とともに、ものすごい震動、しかも上下動が、家もろともに身体を揺さぶった。……中略……だれしも経験したことのない大地震の襲来である。時に午前4時19分、……中略……強震はしばらく（約10分間）続き、大地も、家も、電柱も、樹々も、用水の水も、凡てが揺れ動いたのである。

○三幡村史（現岡山市）

終戦の翌年12月21日未明グラグラッと来た大地震であった。突然何か大きな地響きがあったかと思つた瞬間グラグラッと来た。大きな家がギシギシと不気味な音を出して揺れ始めた。……中略……一寸休んだかと思うとまたギシギシと揺れる。7、8分も過ぎたであろう。やっとおさまった。

○改訂茶屋町史（現倉敷市）

昭和21年12月21日午前4時ごろ、本町全域に地震があった。……中略……水平動が強く最初の一瞬に塀は西側に倒れた。樹木や2階建家屋は音をたてて左右に震動した。

2. 震 度

岡山県南部 = 震度4～6

（参考）—岡山測候所区内地震報告—

	岡 山	西大寺	玉 島	矢 掛	福 渡	津 山	湯 原
総震動時間	5分	4分	9分	10分	10分	無記入	1分30秒
震 度	強震	烈震	中震	中震	中震	弱震	軽震
地 鳴 り	有	有	無	有	有	有	無

※震度は当時の震度階、現在の震度階では

烈震 = 震度6 強震 = 震度5 中震 = 震度4 弱震 = 震度3 軽震 = 震度2

3. 岡山県の被害概要（『岡山県史第13巻 現代I』）

○人的被害：死 者 52人 負傷者 162人

○建物被害：全 壊 1,201戸 半 壊 2,707戸

○その他：電気通信線の破壊、国鉄線路の沈下、堤防決壊、道路損壊等

※以上の詳細は、P.6 昭和21年12月21日地震調査記録：地震被害調査

昭和21年12月21日 地震調査記録：地震被害調査（岡山県下） 岡山測候所

地域	市町村	死者	負傷者	家屋全壊	家屋半壊	家屋小破
備前市	片上町			1		
	伊部町		2	1	10	
瀬戸内市	今城村				1	
	笠加村					1
	福田村					1
岡山市	光政村	8	65	146	188	260
	幸島村	6	1	69	199	63
	津田村	4	4	155	347	536
	九幡村	2	19	24	129	
	豊村		1	28	73	399
	西大寺町	5	6	11	24	
	金田村			7	7	66
	玉井村			1	5	
	朝日村				3	
	御休村					1
	雄神村					1
	可知村			4	1	
	岡山市			7	15	110
	福島*	5	6	90	84	75
	興除村	2	10	200	100	
	藤田村	2	5	30	50	
	沖田村	4	7	223	321	
	操陽村		3	31	372	
	三幡村	7	2	42	26	
	一宮村			5	2	24
白石村			4	40		
大野村			4	1	30	
今村	1	1	8	7		
妹尾町		2	3	9		
吉備町			5			
福田村			10	2		
灘崎町	1	2	10	50	100	
甲浦村	1	5	6	17	50	
小串村			4	7	35	
倉敷市	早島町			4	2	
	倉敷市		1	1	7	
	連島町			16	15	
	玉島町		2	5	12	52
	豊洲村			3	10	
	長尾町			5		7
	富田村			1	7	1
	船穂町					2
	味野町					15
	郷内村					1
	琴浦町			1	3	
	茶屋町	1	7	5	15	13
	庄村			4	6	
	福田村			1	2	
	帯江村			1	2	
中庄村				2		
菅生村			2			
玉野市	荘内村			4	5	10
	八浜町				3	
	胸上村			7	9	15
浅口市	鉾立村			3	10	2
	山田村				4	35
井原市	寄島町	3		1		2
	六条院町					1
笠岡市	里庄村					2
	笠岡町		3	3	114	
	金浦町			2	12	
	今井村		3	2	3	
	北川村				4	
矢掛町	大島村					2
	小田町				3	10
	中川村				3	
井原市	矢掛町					1
	井原町				2	
合計		52	149	1200	2715	1752

*表は当時の記録を転写したものであり、合計が合わない場合がある。
*「(岡山市) 福島」は「福浜村」が正式な村名である。

(その他) 本調査表の備考欄に記載されていた事項

玉島町 新道路小亀裂多数 玉島塩田中破
今井村 国道亀裂
里庄村 山崩れ及び線路小傾斜の為(山陽)本線一時不通
矢掛村 矢掛中学校の壁40間決潰
西阿知町 鉄橋小破、(山陽)本線20日間単線運転
味野村 道路及び橋の破損各1ヶ所
琴浦町 道路亀裂1 煙突3 堤防1
灘崎町 堤防決潰1 亀裂1
茶屋町 橋破損1
早島町 道路破損1
庄内村 橋破損1
甲浦村 道路陥没100米
山田村 塩田破壊復旧見込立たず
香登町 池の堤 亀裂1ヶ所

4. 被害発生原因(液状化と地盤沈下)

(1) 液状化と地盤沈下の関係

○岡山県南部に被害をもたらした主要な要因は地震動に伴う土地の液状化であり、それに数分間続く強い揺れが加わって被害が発生する。

(参考) —中央防災会議の東南海・南海地震による岡山県内の建築物被害想定—

全壊棟数：約4,650棟 = 液状化による全壊：約4,600棟(99%)

揺れによる全壊：約50棟(1%)

○昭和南海地震においても、液状化の危険性が高い県南部の干拓地と沖積層の地域で被害が多発しており、市町村誌等にも噴水・噴砂等の液状化現象特有の記録が残っている。

○しかし、市町村誌等に残る液状化現象はごく限られた地域の記述しかなく、県南部の液状化危険地帯の全てを網羅するものではない。このため将来の「東南海・南海地震」の被害地域を想定するためには、別種の記録から液状化が発生した地域を推定する必要がある。

○注目すべきことは、地震による液状化の発生は土地の地盤沈下を伴う点である。液状化と地盤沈下の関係は次のとおりである。

(液状化と地盤沈下のメカニズム)

地震の前	地下水の中で砂と砂の粒子が接着し、地表層を支えている。
地震発生時(液状化)	地震動によって地下水が砂を攪拌し、泥水のような状態となり上部の構造物などを支えることができなくなる。
地震発生後(地盤沈下)	攪拌した砂が沈澱し、地震前より砂が密着し、砂と水の層に分かれ、水の層が地表層を支えることができなくなり、地盤が急激に不均等に沈下する。(地盤の不等沈下)

(2) 地盤沈下の状況

① 地盤沈下の規模と程度

○昭和南海地震に伴う地盤沈下の程度と復旧の状況は、『岡山県史』に記録がある。

○地盤沈下は児島湾(湖)北岸地域(九幡村・光政村・沖田村・三幡村・操陽村=現岡山市)で大規模に発生している。これらの地域は全て江戸時代以降の干拓地である。

○岡山県は県営復旧事業として耕地の客土、排水路・農道の整備を行ったが、事業対象面積は786haと広範囲で、事業も着手から10年後の昭和37年に完成するなど長い期間を要した復旧事業であった。

地盤沈下と復旧事業(『岡山県史第13巻 現代I』)

家屋・道路などの復旧はそれぞれ行われたが、南海大地震のもたらした最も厄介な結果は地盤沈下で、排水不良地が広汎に出現した。岡山県は県営耕地事業として西大寺市の旧九幡村・光政村430haに対して1952~59年(昭和27~34年)の上南土地改良事業により、工費30億円をもって児島湾海岸の土砂で328万㎡(平均厚20cm)の客土、101万㎡(平均厚76cm)の埋立を実施し、排水路1万m、農道1,363mを整備した。

また岡山市南部の旧沖田村・三幡村・操陽村356haに対して、1957~62年に旭東地区地盤変動対策事業として、工費25億円で排水不良地103万㎡の客土、排水路1万mの改修を実施した。

○更に、『西大寺市史』・『岡山市浦安町史』・『中央気象台地震調査概報』にも耕地の地盤沈

下の記録がある。

- 注目すべきは地盤沈下の程度が30～60cmに達する点である。この大きな地盤沈下の発生原因となった著しい液状化現象が、耕地ばかりでなく域内の道路・堤防・建物等に甚大な被害を与えている。
- また、地盤沈下は児島湾（湖）北岸地域ばかりでなく高梁川下流域の片島（現倉敷市）で発生した記録が残っている。高梁川下流域も干拓地である。従って地盤沈下は記録に残る地域ばかりでなく、干拓地を中心に県南部で広域的に発生したものと考えなければならない。

地盤沈下の程度（市町村誌及び中央気象台地震調査概報）

① 西大寺市史（現岡山市）

○上南干拓

吉井川と百間川に挟まれた南西部の地域、いわゆる九幡、津田、光政の上南地域は干拓事業が1692年に完成した沖新田と称される地域である。以来、当時の姿のまま低湿地420町歩と無数の内堀約215町歩が先人の偉大な業績として今日に伝えられてきた。

ところが、南海大地震の発生に伴い、この上南地区の地盤が、約30cmないし60cm沈下するという全く手の尽くしようがない大被害を受けることとなった。

※地盤沈下対策事業

- 県営上南土地改良事業：客土331町歩・埋立102町歩＝工事費約293百万円
- 団体営上南土地改良事業：農道・用排水路整備＝工事費約48百万円

○幸西干拓

幸西干拓の行われた幸島新田は1694年に完成したものとされている。1833年東幸崎、西幸崎、南幸田、北幸田、東幸西、西幸西の六か村に分割され、営々として今日に受け継がれてきたのである。

ところが、南海大地震により、これらの地域の地盤が、およそ30cmも沈下するという大きな変動を来したのである。

※地盤沈下対策事業

- 団体営幸西土地改良事業：客土28町歩及び区画整理＝工事費約21百万円

② 浦安町史（現岡山市）

南海地震は、地盤の軟弱な我が開墾地にとっては非常な脅威であり、家屋は傾き、道路は亀裂し、農地は沈下して泥土を吹き出し、塩分が湧出するなど地震の爪痕を眺めて茫然自失したのである。

※地盤沈下対策事業

- 浦安土地改良事業：河川浚渫及び道路嵩上げ

③ 南海道大地震調査概報（中央気象台、昭和22年5月1日付け）

高梁川下流左岸外側片島部落（現倉敷市）では、用水流路と田が $120\text{m} \times 100\text{m}$ の範囲50～70cm沈下している。用水流路底は中央が隆起して流れなくなった。

② 地盤沈下の発生範囲

- 市町村誌による地盤沈下の記述は、沈下の規模や程度を知る上で重要な記録ではあるが、記録は大規模に発生した地域にとどまり、県南部一帯で発生した地盤沈下の範囲を特定するものではない。
- このため、更に県内の地盤沈下に関係する資料を調べる必要があったが、岡山市に耕地の

地盤沈下に関する貴重な公文書が保存されていた。

（保存されていた公文書）

- ① 「地盤沈下農地復旧促進全国連盟大会の決議（昭和25年12月12日）」
- ② 「昭和26年度岡山県地盤沈下耕地事業期成会会員名簿」

- 上記①の全国連盟の決議は昭和19年の東南海地震、21年の南海地震に起因する地盤沈下が西日本の沿岸部一帯で発生し、全国的に復旧対策に苦慮したことを示すものである。
- ②の岡山県期成会会員名簿は、県内の地盤沈下の地域を特定する重要な記録である。特に地盤沈下が液状化に起因すること、及び岡山県の建物損壊は液状化が主要原因であることから、当該地域は将来の「東南海・南海地震」発生時に被害発生の可能性が大きいことを銘記しなければならない。
- その証左は、岡山県地盤沈下耕地事業期成会会員市町村とP.6「地震被害調査表」の市町村及びP.3「液状化危険度分布図」の液状化の可能性大の地域がほぼ一致することにある。

全国的な規模での地盤沈下発生と県内の地盤沈下市町村

① 地盤沈下農地復旧促進全国連盟大会の決議（昭和25年12月12日）

中国・四国・東海・近畿地方の沿岸並びに島嶼部においては、東海近畿南海地震に伴い急激な地盤の沈下を生じ、その後も緩慢な沈下を継続しつつあり、低位地帯の農地はこれがために排水不良、海水の進入、塩害等の脅威にあり……中略……政府に対し之が対策に充分の予算を計上されんことを要望する次第である。右決議する。

② 昭和26年度岡山県地盤沈下耕地事業期成会会員名簿

岡山市、倉敷市

御津郡大野村、今村、白石村、芳田村、一宮村、平津村

赤磐郡高陽村外1村

和気郡福河村

邑久郡裳掛村、国府外5村、幸島村、笠加村、長浜村、豊村外4村、国府村

上道郡可知村、平島村、西大寺町、雄神村、光政村、津田村、九幡村、沖田村、三幡村、沖田外2村、浮田村

児島郡小串村、興除村、藤田村、灘崎町、荘内村、山田村、福田村、琴浦町

都窪郡吉備町、中庄村

浅口郡玉島町、連島町、六条院町、黒崎村、大島村、金光町、里庄村、寄島町

小田郡金浦町、城見村、神島内村、神島外村、笠岡町、白石島村

（岡山県地盤沈下耕地事業期成会会員名簿から判明した留意事項）

- 岡山県内で液状化が発生する地域は、主に児島湾（湖）及び瀬戸内海沿岸の干拓地や埋立地と一般的に考えられてきた。
- しかし、岡山県地盤沈下耕地事業期成会会員名簿が示すとおり地盤沈下（＝液状化が起因）の発生は県南の平野部を網羅するまで広がっているのである。
- 特に、知られていなかった事実は、中小河川流域で地盤沈下発生地域が顕著に内陸部に遡上している点である。

○これは、河川流域への砂質層の堆積と河川からの地下水が高い水位を保っているからである。

※各中小河川流域における地盤沈下地域の最上流ポイント

- 千田川＝国府村（現瀬戸内市）
- 砂川＝高陽村（現赤磐市）
- 笹ヶ瀬川＝一宮村（現岡山市）
- 足守川＝吉備町（現岡山市）
- 里見川＝里庄村（現浅口郡里庄町）

5. 津波

- 海溝型地震は震源が海底であることから必ず津波が発生する。また、津波の規模は地震規模に比例するため、マグニチュード8以上の巨大地震である東南海地震や南海地震では大津波が発生している。
- 昭和南海地震では、和歌山県及び高知県の太平洋沿岸で5～6mの津波が記録されている。
- 岡山県でも津波が観測されており、津波の高さは1m以下であったとの記録が残っている。なお、津波による被害は市町村誌等に記録されていないことから、県内の被害はなかった可能性が大きい。

岡山県の津波の状況（岡山測候所記録）

岡山県下の津波の余波は下記のごとくで、最高潮は1m以下であり被害はほとんどない。

岡山測候所：当所の面する旭川では10時10分津波の余波を受けて旭川が逆流しており高潮の高（現県庁付近）さは0.4mを観測した。

6時から10時まで2回大きな高潮によって旭川が相当の急流となって逆流したため小舟の運行は中止された。

三蟠港：津波の余波を受けて2、3日大潮となった。当時は変潮で引潮、盈潮（満潮の意味）が交互に起こり、青土が潮とともに吹き上がり土手が作られたという。

九蟠港：高潮0.9mという。

児島湾干拓地：60cm位増し、ややたって引き再び前よりは少ないが満ちてきた。坂田塩田の被害もあり、津波の余波に関しては調査中である。

岡山測候所「昭和21年12月21日地震調査記録」地震報告（12月26日付け）

6. 岡山県内の被害状況

(1) 被害状況の概要

- 昭和南海地震は、岡山県南の平野部一帯に被害をもたらしているが、被害が最も大きかったのは児島湾（湖）北岸・西岸の干拓地であり、続いて高梁川下流域、笠岡湾沿岸となっている。
- 昭和南海地震の全体像は、『岡山県史』に次のとおり記載されている。

県内の被害状況（『岡山県史第13巻 現代I』）

1946年（昭和21）12月21日午前4時19分に、紀伊水道南方の東経135度、北緯33度を震源とする大地震が発生し、四国・近畿・中国に大被害が生じた。被害総計は死者1,362人、全壊家屋11,306戸で、和歌山県南端では津波の高さ6.6mに達し、高知県では室戸岬が大きく隆起したのに対して高知平野は沈降し、高知市では浸水家屋が多数に及んだ。

岡山県下では、県南部海岸地帯に被害が集中した。岡山では震度5を記録したが、地盤の軟弱な沖新田一帯に最も被害が大きく、地盤沈下が生じて堤防は各所で破損し、満潮時には浸水する場所も生じた。西大寺警察署管内の上道郡沖田・光政・操陽・三蟠の各村（いずれも現岡山市）では、完全な家屋は皆無という状態まで全・半壊が続出し、岡山市内では重軽傷者5人、全壊190戸、半壊575戸、要修理2,166戸で、被害の80%は福浜地区に見られた。県下の合計では死者52人、負傷者162人、家屋の全壊1,201戸、半壊2,707戸に達したほか、玉島・笠岡警察署管内の電気・通信線がほとんど破壊された。そして国鉄線路の沈下・堤防決壊・道路損壊もあり農作物にも被害があった。地震発生時が未明であったため混乱は大きかった。

- 更に、新聞記事は県内の被害状況を詳しく伝えている。

なお、掲示する合同新聞の発行日が地震の翌々日12月23日であり、被災直後の混乱の中での取材編集のために、被害の数において後に調査した数値との整合性はとれていないが、県内被害の全容を知るには、最も適した資料といえる。

岡山県南部地方が中心、家屋全半壊1,800余戸、死傷者110余名

合同新聞（昭和21年12月22日付け）

21日暁に襲うた地震は、岡山県下でも午前4時19分56秒から約10分間水平動に揺れ、殊に南部海岸地帯が被害大きく、西大寺署管内の沖田村のごとき全家屋ほとんどが大小の損傷を受け、西大寺町金岡部落も激しい。倉敷、岡山西、牛窓署管内がこれにつき、玉島、笠岡署管内は一切の通信網が破壊されたが、午後3時に至りようやく復旧。岡山西署管内は高圧線が随所にスパークもの凄い火焰を発生し、震動に驚いて大部分の市民は屋外に避難、電話不通、電気消え、鳥取大地震の時よりも騒然たるものがあり。作州、備中北部方面は異状を認めず平静である。

午後3時県警察部に達した報告によれば、全県下で死者44名、傷者75名、家屋全壊566戸、半壊1,285戸、各署別内訳は次の通り。

▽西大寺署＝死者27名、傷者106名、全壊1,978戸、半壊628戸、海岸堤防決壊1ヶ所

▽倉敷署＝死者5名、傷者15名、全壊302戸、半壊238戸、倉敷市水道使用不能、国道不通1ヶ所

▽岡山西署＝死者5名、傷者8名、全壊104戸、半壊116戸、笹ヶ瀬川堤防決壊3ヶ所

▽牛窓署＝死者5名、傷者3名、全壊47戸、半壊4戸

▽味野署＝死者1名、傷者2名、全壊26戸、半壊103戸

▽宇野署＝死者1名、傷者6名、全壊14戸、半壊75戸、瓦の落ちた家多数

▽片上署＝傷者2名、全壊2戸、半壊10戸

▽瀬戸署＝傷者1名、半壊2戸

▽笠岡署＝傷者2名、全壊13戸、半壊10戸

▽井原署＝半壊2戸

▽玉島署＝死者5名、傷者7名、全壊70戸、半壊150戸

▽矢掛署=半壊10戸

なお、児島郡藤田村、興除村、灘崎村内の被害は家屋倒壊40戸、半壊200余戸、灘崎村高崎では堤防300m決潰、琴浦で田ノ口堤防500m決潰した。

(2) 被害状況の詳細

- 岡山県内では、被害の著しかった児島湾（湖）北岸・西岸の郡誌・町村誌に詳しい記録が残っている。
- なお、これら郡誌・町村誌に記録がある地域の大半は、江戸時代以降の干拓地であることから、町村誌には「干拓地の軟弱地盤による被害」等の記述が多く見られるが、被害の主要原因は液状化であることに留意する必要がある。

市町村誌等の被害状況の記録

(旭川以東)

① 改訂邑久郡史（現瀬戸内市・岡山市）

邑久郡被害、家屋全壊54、半壊121、地域は幸島・豊・今城・福田・笠加の各村が最も激しく倒壊又は半壊家屋は幸島村で住家15、非住家18、豊村で住家25、非住家123、同村国民学校舎2棟半壊、今城・福田両村にて住家3棟倒壊、軒の一部落下したるもの約20戸、死者は幸島村にて倒壊家の下敷となりたる6人家族中5名まで死亡、負傷者は幸島村2名、豊村1名、道路の亀裂は豊村で県道約200m、堤防の決潰は朝日村西片岡沿岸約200m、塩田の被害は鹿忍町15町歩

② 幸島新田開拓300年記念誌（旧幸島村：現岡山市）

地震は10分あまり続き古老もまだ経験したことのない大地震であった。

夜のあけやらぬころ、消防団の人たちが、全壊した家、火災が発生した家の救援に走る。30分ほど経ったであろうか、やっと地震の静まった家の内は、家財道具が散乱し、戸障子は倒れてガラスがとび散り、危険で入れない状況である。田んぼは青泥を噴き、それが特にひどかったのは、東幸西の百島山の北であった。この地震で、母屋が倒壊して4人の家族が痛ましい犠牲となられ、隣の兵庫屋は倒れたうえ火災が発生し、老人が焼死された。

③ 沖田村誌（現岡山市）

昭和21年の大地震は未曾有の惨事であり、その被害は人畜家屋はもとより道路橋梁等各方面に涉り、震災の実情は筆舌の容易に表現しあたらざるものがある。

※沖田村被害

死者=4人 重傷=5人 軽傷=6人

全壊=183棟（住家59、納屋60、その他64）

半壊=321棟（住家159、納屋107、その他55）

④ 三幡村誌（現岡山市）

（南海大地震の思い出：住民証言1）

突然起こった大地震には驚きと恐怖で一杯でした。役場勤めの身、村の事が心配になり、夜明け前で真暗であったが、歩いて村内を回って見た。暗闇の中では余り被害はないような気がしたが東がしらむにつれ、被害の甚だしいのに驚いた。家屋の全壊、半壊、大破は数知れず、家は立っていても骸骨のようなもので、屋根瓦は落ち、壁は崩れている始末、特に江並三幡港方面は地盤沈下甚だしく、波止場は亀裂を生じほとんど全滅の状況であった。今までにこんな激しい地

震にあったことは聞いたこともない。新田地帯の軟弱な地盤が関係していることがよくわかる。村内でも南から北に行くほど被害が次第に少ないような気がした。役場はやっと全壊をまぬがれたが、裏の会議室はほとんど駄目であった。復興は大変なことだと思いふけりながら我が家に帰ってみると大変、家は傾き、本屋の屋根瓦は落ち、釣り屋は全滅の有様であった。

（南海大地震の思い出：住民証言2）

絶対に忘れることの出来ないものの一つが南海大地震である。当時全く途方にくれた。戦争もすんでやれやれと思っていた矢先の出来事、何という不運な出来事であろう。……中略……「それ地震だ皆早く起きて外に出る」と命令して雨戸を開けようとしたが何としても雨戸が開かない。まともに歩けない。灯りは消え、真暗やみ、仕方がないので大黒柱の側にしがみついた。死なば家内もろとも、地震の休むのを待つしか方法がなかった。キシギシと音をたてて家が益々揺れる。棚はひっくり返る、上から物が落ちてくる。妻や子供は真っ青になって震え上がっている。しかしどうする事もできない。7、8分も過ぎたであろう。やっとおさまった。外に出た。外はまだほの暗かった。道路や田んぼは大きな地割れが出来ていた。家屋の方はどうかと見ると本屋と長屋の間の釣り屋が落ち大穴があいている。本屋も傾いている。倉庫や長屋瓦が飛んで落ちていた。ほんの一瞬の出来事であった。……中略……夜が明るくなるにつれて近隣の様子ハッキリしてきた。あそこの家がたおれている。向こうの家も倒れかかっている等全く無惨な光景が浮かび上がった。如何に今度の地震が激しかったかが想像されるであろう。旭川堤防へ出てみると三幡港から宮道辺りに至る道路に大亀裂が出来大穴が出来ていた。三幡にとっては大損害である。

⑤ 操陽村史（現岡山市）

「地震だ！」人々は反射的に起き、戸外に脱出したのである。だが、揺れが余りにも大きかったので、2階のある家では階段が外れて落ちたものもあり、それを知らずに慌てて下に降りようとして、そのまま落下し大怪我をした人もあった。だれしも経験したことのない大地震の襲来である。……中略……「この地方は新田なので地盤は柔らかく、地震で家はよく揺れるが、倒れるようなことはない。」古老から聞かされている言葉である。しかし、今度の地震には通用しなかった。揺れる送電線が接触して「ばち・ばち」と音を立てながら青白い火花を散らし続けている。大音響とともにどっと家が倒壊していく。白い土煙が高く舞い上がる。薄れる土煙の中から崩れ落ちた屋根が、ひしゃげた家の残骸が見えてくる。なんともいえない凄まじい光景である。まるで地獄絵を見ているようだった。約30分程して余震も収まり、人々が家に戻って驚いたのは棚から物が落ち、障子が破れ、ガラスが割れて、家財道具が散乱しているからではなかった。柱という柱は全てひびいており、土台は土台石からはみ出されていたからである。「これでよく倒れずにすんだものだ。」と、人々は慨嘆せざるを得なかった。やがて周囲が明るくなり、消防団の本格的な救援活動がはじまったのである。

(旭川以西)

① 興除村史（現岡山市）

地震による災害は、地盤の軟らかい興除新田ではどうしても避けられないことである。岩盤はないかわりに柔らかい海底の粘土と砂地で、その上に丸太棒などを打ち込んだ基礎に建てられている家屋だから、上下・左右動はどちらもよくこたえるのであった。

村内の被害は次の通りである。

◎倒壊家屋合計28戸

◎半壊家屋合計で数10戸に及ぶ

◎一部損壊は全村のことであった。

特に曾根国民学校の被害は、大変激しく、校舎では授業ができないので、曾根と西畦の公会堂を

臨時校舎として分散授業をしたのであった。

② 藤田村史（現岡山市）

児島郡では荘内・灘崎・興除・藤田の各町村の被害が大であった。わが藤田村では興除村との境に沿って帯状に倒壊家屋が多かった。地盤の軟らかいかつての滲筋（みおすじ：舟の運行のため掘削した航路の意味）であったかと思われる。わが村の被害は

○人は3名死亡、4名重傷、軽傷10人

○建物では、家屋全壊115棟、半壊327棟、2分～4分倒壊38棟

で屋根瓦の滑り落ちたもの、ひさし・壁のおちたもの、柱の折れたもの、家の傾いたもの等大なり小なり被害は全村に及んだ。

○海岸災害堤防の延長1,917mで内崩壊1,024m

農道橋梁の折れたり落ちたりし、また道路・農道・田面に亀裂の生じたりしたところが方々に見られた。

③ 児島湖発達史（現岡山市）

浦安地区でも、地盤が軟弱で、家が傾き道路には亀裂を生じ、農地は沈下して泥土を吹き出し、塩分が湧出するなどの被害があり、……中略……灘崎、荘内、八浜方面の古地は地盤が固いので被害はほとんどなかったが、高崎方面は藤田興除方面よりやや被害が軽度であった。

④ 改訂茶屋町史（現倉敷市）

本町全域に大地震があった。死者1名、全壊家屋7戸、半壊家屋数十戸。屋根の瓦がすべて波のようになったもの、ひさしが落ちたものはほとんど全戸に及んだ。真夜中で皆寝ていたから、暗さは暗し戸は開かず、避難には困難を極め、負傷者は多かったが、幸い皆火を消していたから火災は起こらなかった。もし、炊事時であったら関東大震災のようになっていたであろう。

（留意事項）

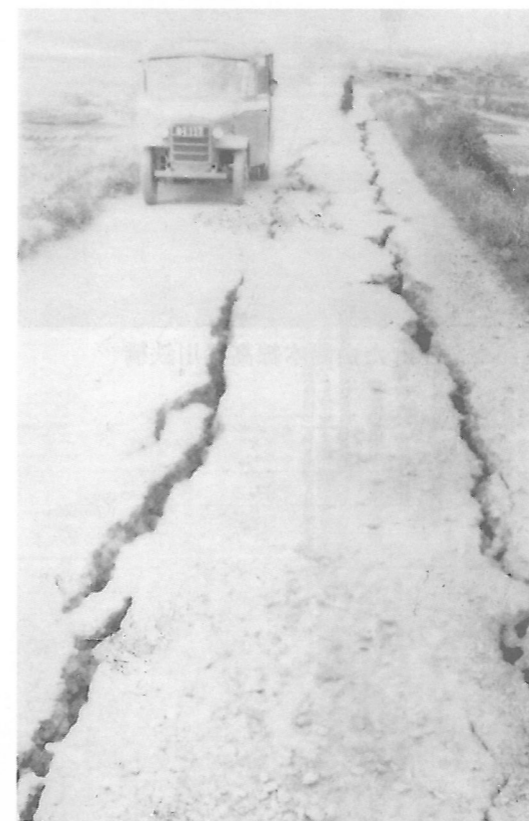
- 上記児島湾（湖）沿岸市町村以外の市町村誌には昭和南海地震に係る記録が見あたらない。
- しかし、高梁川下流域の旧玉島町・連島町（現倉敷市）、笠岡湾北岸の旧笠岡町・金浦町（現笠岡市）は干拓地であり、事実、昭和南海地震でも数多くの建物被害が発生している。（参考）P.6 昭和21年12月21日地震調査記録
- また、昭和21年以降も児島湾（湖）沿岸・高梁川下流域・笠岡湾沿岸では埋立や干拓事業が継続されるとともに瀬戸内海沿岸各地で埋立地が拡大した。
- 更に、農業用干拓地及び塩田跡地が宅地に転用され市街化が進んだ地域も多い。
- このように県南部一帯で、昭和南海地震当時よりも液状化危険地帯が拡大するとともに、市街化の進展により、現在は、一層危険性が增大していることに留意が必要である。

昭和南海地震の被害記録写真

（写真提供：岡山地方気象台）



全壊した家屋（岡山市三幡付近）



亀裂の入った道路（岡山市三幡付近）



沖田神社の鳥居（岡山市沖元）



全壊した家屋（玉野市八浜付近）



(上・下段)
昭和21年12月22日付け
「合同新聞」



2 安政南海地震

1. 発生

前述したように東海地震・東南海地震・南海地震は強い連動性がある。安政南海地震は、安政東海地震発生からわずか32時間後の1854年12月24日に発生した。安政南海地震の地震規模はマグニチュード8.4と大きく、昭和南海地震（M8.0）の4倍の大きさの巨大地震であった。

- 発生日時 1854年12月24日午後4時頃
※旧暦 安政元年（嘉永7年）11月5日
- 地震源 南海地震震源域（土佐沖）
- マグニチュード 8.4

(参考) —嘉永7年の年号改定—
東海、南海の両地震による大被害が全国的に発生したことから、嘉永7年11月27日に年号が嘉永から安政に改定された。年号改定年は、遡って改定された年号を用いるため安政元年の地震となっているが、古文書には嘉永7年の記述が多い。

(参考) —安政東海地震—

- 発生日時 1854年12月23日午前8時頃
※旧暦 安政元年（嘉永7年）11月4日
- 地震源 東海・東南海地震震源域（遠州灘沖）
マグニチュード 8.4

※安政東海地震の地震源は東海と東南海地震域であるため、現在の地震区分では東海地震と東南海地震の2つの地震が同時発生したこととなっている。

発生時の状況（『日笠家文書』）

11月4日朝五つ時（午前8時頃）過ぎに相当な地震があり、同日の夕方にも3度地震があった。5日の晩七つ時（午後4時頃）に大地震が起こり、長く揺るぎ、西南の方角からどろどろという大きな音が聞こえて、誠に恐ろしきことで記述できない程の大変な揺れであった。

2. 震度

岡山県南部で震度4～6と推定されている。安政南海地震も地震動が長く続いている。県内にも次の記録が残っている。

※地震の揺れは長い揺れにつき、3、4丁（330～440m）離れた所へ行って帰るほど長時間揺れた。……1分間に70m歩くとして10分強（『矢吹家文書』）

3. 津波

全国＝高知県 最高16m、徳島県 最高9m
県内＝最高5m程度（P.20『秋岡家文書』参照）

瀬戸内市虫明の津波の状況（『虫明村記録』）

安政元年の大地震の際に海嘯（津波）の徴があった。一昼夜間に潮水の進退はおよそ2、30回にも及び、満潮の時一時平水よりおよそ7尺余（約210cm）も増し、これがために瀬溝海峡（長島と本土の間）のごときは、およそ3尺余（約90cm）の土砂で塞がれ、扇浜（虫明地区）は泥土で2尺余（約60cm）埋まってしまった。それまでは300石積の船舶が停泊していたが、今は漁船が入るのみ。

(留意事項)

- 上記『虫明村記録』には、津波の特徴がよく記録されている。
- 津波の特徴は、一度では終わらず長時間の間に何度も来襲することと、海底の洗掘による土砂移動にある。特に瀬戸内海でも海底洗掘現象による土砂移動が発生していることから、将来の発生時には十分注意する必要がある。

※海底洗掘現象：津波が海底土砂を掘削し、土砂を運ぶ作用で港湾・航路等が埋まる。

4. 余 震

安政南海地震では余震が数多く発生し、長期間継続した。

震源地に近い高知県では翌年末までの約14ヶ月間に800回以上の有感地震が発生したとされている。

震源地から離れた岡山県でも余震が長く続いており、次の記録が残っている。

余震の記録（『日笠家文書』）

（5日夕方の大地震の後、）夜五つ時（午後8時時）頃再び2度大揺れし、夜通し休みなく揺れが続いた。6日朝にも1度相当な揺れがあった。同日から10日頃にかけては、日中に3、4度、夜には3、4、5度、10日頃には1日に2、3度、14、15日頃には小さい揺れが一昼夜に2、3度くらいとなり、次第に収まった。

5. 被害状況

全国推計＝死者3万人、全壊家屋2万戸、半壊4万戸、津波流失1万5千戸

県内推計＝現時点では推計数がない。

（参考）—岡山県内の被害状況—

- 岡山県内の全体被害に関する記録はなく被害を推計できない。しかし、断片的ではあるが県内各地に地震記録が残っている。……次ページ以降に紹介
- 特に被害状況がまとまって記載されているのは、下記の『郡々破損所寄目録』である。目録は備前藩領内で城下町岡山以外の村々の被害を集計したものであるが、建物・道路・堤防の著しい被害とともに田の噴砂等の程度が克明に記録されている。
- これらの被害は液状化がもたらしたものであるが、安政南海地震の規模（M8.4）が昭和南海地震（M8.0）の4倍の大きさであったことから、液状化の程度と範囲がより大きかったものとする。

備前藩領内城下町岡山以外の村々の被害の程度（『郡々破損所寄目録』）

建物＝全壊（本家・長屋・納屋・土蔵等）：703軒、半壊：1,964軒

施設＝海岸堤防破損：延長1,468間（2,642m）、池・川堤防と道路破損：延長11,061間（19,910m）、

用水・川・溝破損：50ヶ所、石・土橋の落橋：55ヶ所、水門・石樋等破損：9ヶ所

耕地＝田畑の亀裂・泥砂水の吹出し：2,434ヶ所

資 料

- ① 花房家文書
「花房銀三郎地震日記」
- ② 国富家文書
- ③ 秋岡家文書
「先考遺筆」
- ④ 長瀬家文書
- ⑤ 藤原家文書
- ⑥ 萩野家文書
「御用記録」
- ⑦ 大地震大変控
「備中小田郡笠岡村控 大津屋安兵衛」

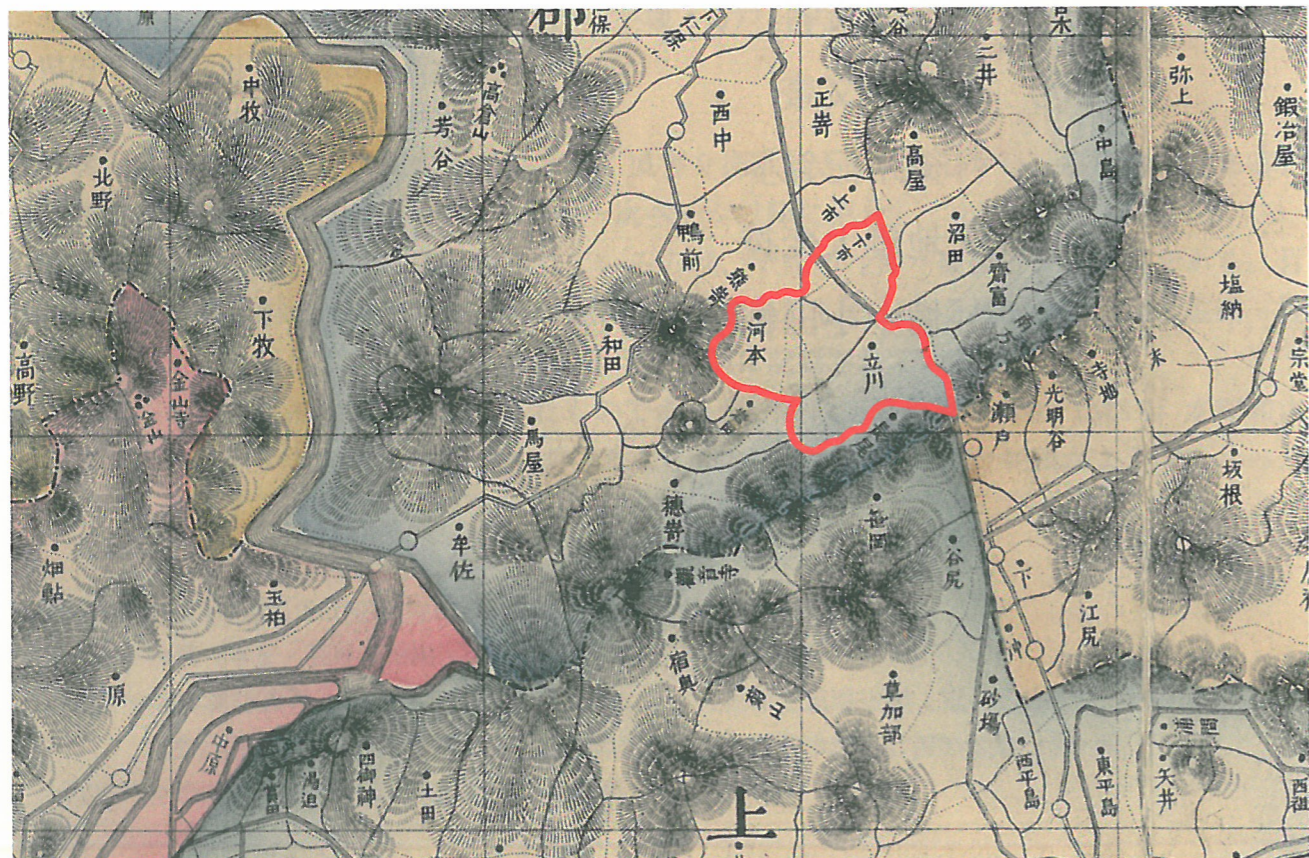
① 花房家文書「花房銀三郎地震日記」

花房家文書 花房銀三郎地震日記

赤坂郡高屋村（現赤平市高屋）の名主花房銀三郎が記した安政南海地震の記録で、永代御用留の中に収められている。日記には伝聞、風評も記されているが、砂川水系の被害状況、とりわけ液状化の様子が生々しく綴られている。

一 寅十一月四日朝五ツ時（午前八時）地震甚だしく一同驚き申し候ところ翌五日晚七ツ半時（午後五時）前代未聞の大地震にて、いづれも家より飛び出し、牛馬に至る迄追い出し火の用心いたし候ところ、自宅は山屋敷地堅く震え軽く少しも損じこれなく、沖合下市・河本・立川辺で格別甚だしく、道筋拾間（約一八間）ばかりも下市・河本の境古川筋に割れ目でき、同所田地五寸（約一五cm）ばかりも高低相い成り、割れ目付き候ところよりは青どべ吹き出し、又はどろ水吹き上げ麦田を水流れ、あるいは、あら田長く割れ目でき、家宅は大地震にて棚などにこれ有るものは悉く落ち損じ、戸障子倒れ屋根うだれ瓦落ち、砂川堤防筋の家は柱五、六寸（約一五〜一八cm）ばかりもずり込み箱棟煙出しなどは段々下市・立川辺で落ち損じ申し候右五日晚の地震の砌西南の方より地鳴り、大筒を続けこれ搏つ如く大響きいたし、誠に以て恐ろしく衆人顔色変し申し候、かような村々は家少々ねじれ又跡も恐ろしくその儘家の内へ這い入り申さず門と又は藪などに歩行板を並べ小屋掛けいたし、家内中諸とも野宿にて夜を明かし候、右五日夜四ツ頃（一〇時頃）又大地震引き続き六日朝迄治まり申さず……

海辺は大津波上がり所に寄り人家とも一緒に引き退き申し由、沖新田は唐樋を損じ本家潰れ新田には段々これ有り、とかく平地甚だしく瀬戸下村、檜原、西大寺当たり破損夥しく、邑久郡豆田、尾張辺には潰家数多くこれ有り、土塀は大体残らず倒れ申す由、所どころ鳥居石灯籠の損じ多く……

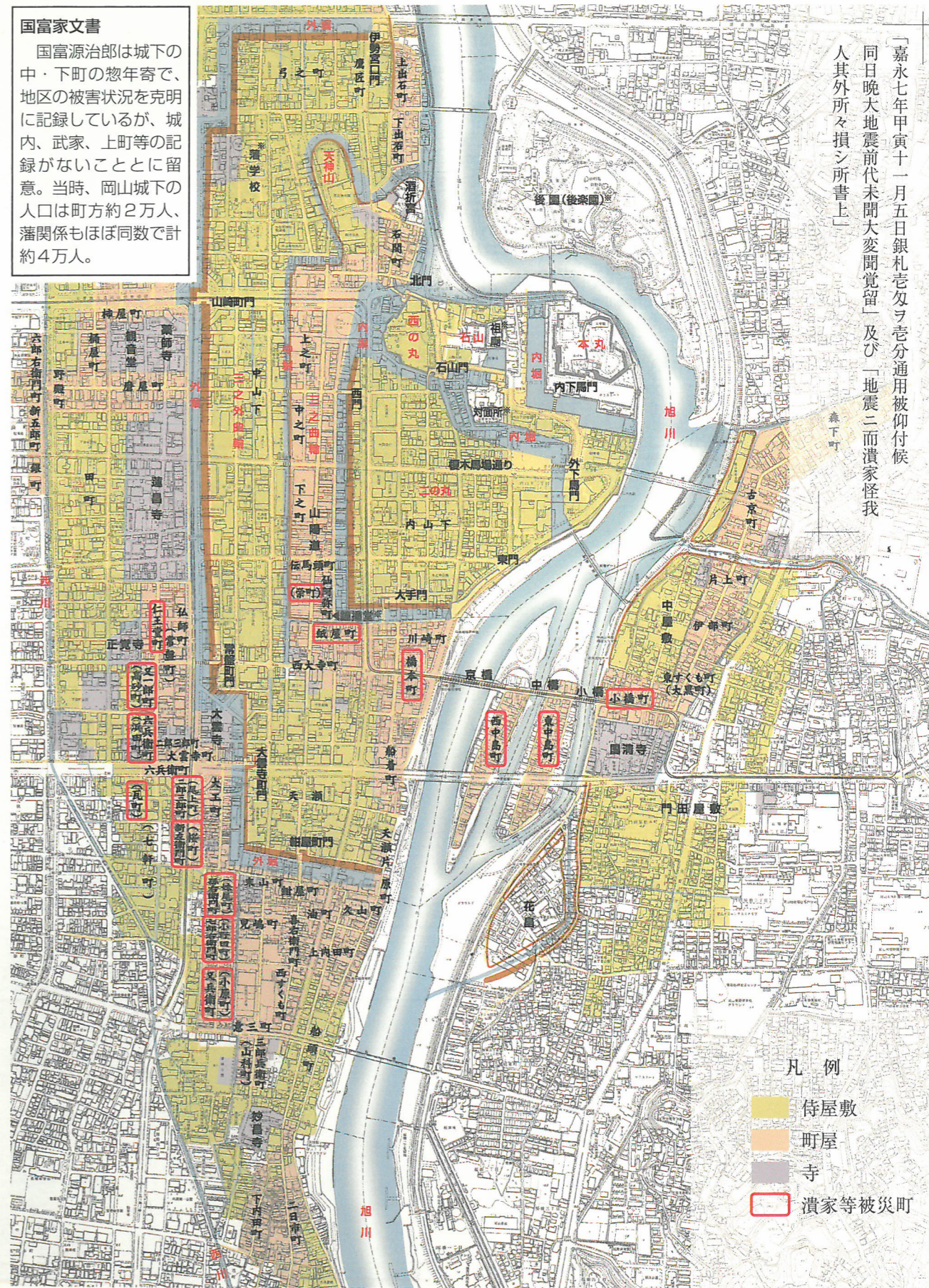


明治18年「岡山県三国地図」（岡山県立図書館蔵）部分

② 国富家文書

国富家文書

国富源治郎は城下の中・下町の惣年寄で、地区の被害状況を克明に記録しているが、城内、武家、上町等の記録がないことに留意。当時、岡山城下の人口は町方約2万人、藩関係もほぼ同数で計約4万人。



「くらべてみよう江戸時代と現在のまち」（岡山市デジタルミュージアム蔵）をもとに作成

「嘉永七年甲寅十一月五日銀札老々ヲ老分通用被仰付候同日晩大地震前代未聞大變聞覚留」及び「地震二而潰家怪我人其外所々損シ所書上」

③ 秋岡家文書「先考遺筆」

秋岡家文書 先考遺筆

川入村（現倉敷市川入）名主秋岡惣五郎が、地震直後に、岡山近辺まで歩き、惨状を記録したもの。記述は精彩に富み、被災現場での液状化の様子などが克明に記されている。

*そのほか海岸大損の由、児島郡にて朔日十二月より一丈五、六尺（約四・五〜四・八m）高く来たりと後日に承り候

*御野郡大痛みの由、上道新田は別して大痛み候、家たおれ、又はすり込み数多き由

*岡山にても二軒、三軒づつ所々に潰れ家これ有り

⑪庭瀬・撫川・定杭は格別大痛に候へども、花尻にては一向に損じこれ無し

⑩びくに橋は大痛に候へども、二丁か三丁か（約二〇〜三三〇m）行き、野殿村は痛み数無く、往来より北手山に付き候家は痛みなし、往来より南手へこれ有る家は壁損じ居り申し候

⑨山寄りの村々は痛み数無く、子位庄・浅原・西坂・生坂辺は家・壁などに痛みなし

⑧浜村の内中樋の東、田の中に青土吹き出し居りと申すに付き、見物に参り候所、所々に穴明き吹き出し申し候由、吹き出す時は凡そ二、三尺（約六〇〜九〇cm）も吹き上げ申し候、その穴へ三間（約五・四m）くらいの棒は少しも障りなしに這入り申し候

⑦びくに橋三、四軒潰れ、地面ひくくなり候田地もこれ有り、又青土吹き出し候処もこれ有り、一宮も大痛に候へども、撫川程にはこれ無し

⑥定杭大痛、潰家十三、四軒、半潰多く、無事なる家はなし、撫川・庭瀬の内にも七、八軒潰れ、撫川大橋横ゆり込み、橋落ちる、その後定杭は目もあてられぬ事に候

⑤中島新田にては、ひさしなど落ち、急ぎ外へ出で候得ども、地面割れ甚だ危うくに付き、歩行板又ははしごなどに乗り居り申し候由、尤もたちながらは居られずと申すくらい

④水江村にくり綿商い仕り船積み場所、川原へ出し候俵、数積みかさね置き候ところ、地震にてくずれ、折り節し砂場大いに割れ、その割れ目へ一俵転び込み、その上へ砂かかり候……

③下辺四十瀬新田の辺にては家も大痛、間には四、五寸（約一二〜一五cm）より一尺位（約三〇cm）も地中へすり込み候もこれ有り

②大内村にては東の方北より南へ通し大痛（大損害）、家々ひさし落ち、家ねじれ、地割れ、五寸位（約一五cm）口を明け、青きどろを吹き出し候処もこれ有り、また田地二、三尺（約六〇〜九〇cm）もおし出し、すき畑大にゆがみ候も有り、又一間方、二間方（約一・八〜三・六m）地面すり込み、その土いづれへ行き候哉相知り申さず、不思議千萬

①川入にては、或いは本家・長屋一棟同様に付きおり申す分、震え候時は凡そ一尺五寸程（約四五cm）づつ明き、是にて考え候へば、瓦葺きにて上の重き家は一尺五寸、二尺（約四五〜六〇cm）もかたむき候哉に存じられ候、家々壁割れ、間には落ち候ものもこれ有り、ひさしなども痛み、落ち候もあり



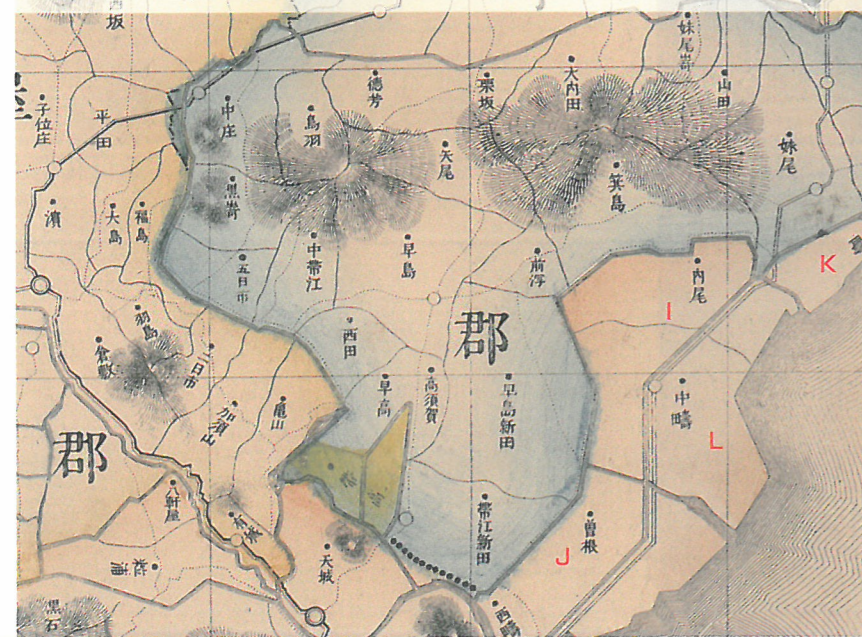
明治18年「岡山県三国地図」（岡山県立図書館蔵）部分

④ 長瀬家文書

長瀬家文書

長瀬家は御野郡田中村（現岡山市田中）の名主。文書には長屋・本家・納屋・土蔵など建物別に、人牛の怪我も含めて被害状況が記されている。

No	地名	本家等		長屋・土蔵	
		全壊	半壊	全壊	半壊他
1	米倉村（現岡山市米倉）		1	1	5
2	泉田村（〃泉田）	5	3	10	5
3	奥内村（〃奥田、奥田本町、岡南町、東古松）				
4	浜野村（〃浜野、新福、富福町、洲崎、豊浜町）		3		7
5	岡村（〃春日町、岡町、鹿田町、清輝橋他）				
6	万倍村（〃万倍）		8	12	
7	円覚村（〃豊成）				
8	留田村（〃福田）		1	4	2
9	新福村（〃新福、豊成、豊浜、福富、福富西）	6	2	6	1
10	浜田村（〃洲崎、富浜、福浜、三浜）			2	1
11	青江村（〃青江、豊成、十日市西町）		19	22	12
12	福田村（〃福田）		10	2	9
大手堤石垣損所 数ヶ所					
13	十日市村（〃十日市、神田町、青江）			2	
14	七日市村（〃旭本町、七日市、十日市、舟入町）				2
15	東古松村（〃東古松、鹿田町、大元駅前、岡町他）			4	
16	富田村（〃富田、神田町、十日市、青江）	1	1	8	
17	青江新田（〃青江）			5	
大手堤石垣損所 7ヶ所					
18	米福村（〃福富）	1	4	1	1
19	福成村（〃福成、三浜町、千鳥町、浦安本町他）	2	1	5	2
20	田住村（〃奥田南町、岡南町）	2		2	
21	新保村（〃新保）			16	7
22	福嶋村（〃千鳥町、並木町、福吉町、福島他）	1	11	4	4
23	尾上新田（〃千鳥町、並木町、福吉町）	4	4	3	
24	当新田村（〃当新田）	6	16	44	48
計		28	84	146	109



「嘉永七年寅十一月 去ル五日晩大地震ニ而村々潰家書上
御野郡 田中村控」

⑤ 藤原家文書

藤原家文書

藤原家は上道郡藤崎村（現岡山市藤崎）の大庄屋。村ごとに潰れた家の軒数と坪数が記されている。

	地名	潰家	坪数
A	沖田新田一番（現岡山市江崎、江並）	8軒	77坪
B	〃 三番（〃 藤崎）	11	130
C	〃 四番（〃 桑野、沖元）	13	125
D	〃 五番（〃 光津）	10	117
E	〃 六番（〃 政津）	2	17
F	〃 七番（〃 君津）	1	11
G	倉田村（〃 倉田）	2	113
H	金岡村（〃 金岡西、東町）	7	30
I	興除新田内尾（〃 内尾）	2	26
J	〃 曾根（〃 曾根）	8	71
K	〃 東畦（〃 東畦）	3	26
L	〃 中畦（〃 中畦）	2	25
計		69	768

*左表・上表ともに就実短期大学教授芳賀修著「岡山県南域における『安政南海地震』の被害について」（『吉備地方文化研究第5号』所収）をもとに作成



明治18年「岡山県三国地図」（岡山県立図書館蔵）部分

「嘉永七年寅十一月 大地震潰家書上帳」

⑥ 荻野家文書「御用記録」

荻野家文書 御用記録

文書には児島郡内の村々の塩田の液状化や海岸堤防等の被害状況が記録されている。

右の通りご注進申し上げ候、今以って折々少動仕り一等心痛仕候

以上

御注進

- 一 去る四日朝五つ時（午前八時）過ぎ頃より度々地震仕り、五日夜七つ時（午後四時）頃大地震にて味野村破損の趣左の通りに御座候
- 一 新浜之内
 - 丁子新田沖の堤凡そ長さ百廿間（約二一六m）ばかりの間石垣高さ二尺（六〇cm）ばかり潰れ込み土手を割り内立てめり込み地場へも汐泥所々へ吹き出し
 - 野崎浜少し堤石垣凡そ長さ二拾間（約三六m）ばかりの間破損仕り、土手も同様に押し込み申し候、地回り堤土手所々長さ凡そ百五十間（約二七〇m）ばかり割り内立地場所々へ汐泥吹き出し
- 一 右の通り損じ候得とも早々取り繕い本切にはおよび候程の義にては御座無く候、塩浜破損数多く御座候
- 一 古地分においては破損所御座無く候
- 一 御高札場人牛家別して破損怪我など御座無く候

⑦ 大地震大変控 「備中小田郡笠岡村控 大津屋安兵衛」

大地震大変控「備中小田郡笠岡村控 大津屋安兵衛」

文書には干拓地に形成された市街地に液状化が発生し、建物・道路・橋・はと（波止め堤防）等への被害状況が記録されている。

……五日七ツ半申下刻（午後五時）より大地震と相い成り笠岡申すに及ばず近辺近村大変地震に御座候その時笠岡村だけの儀は書き写し置き申し候当村称念寺橋より東は真入川までの間大ゆりに御座候北は殿川町千一町瀬の町この筋は大損事にて札場筋より川辺屋町公事場筋損亡無し又は風呂屋町八軒屋町損亡無し崩落死人は殿川にて五、六人死去仕り候……家元御検分村役人へ願出し市中付け留め相い成り大崩れ大損じ少しの家数六百四十五拾軒帳面に……外町は大ゆりだけの事ゆえ損じこれ無く、浜湊筋損亡は一文字筋中ばと二筋われ、西ばと新ばと一尺五寸（約四五cm）より三寸（約九cm）まで十二筋ほどわれ、新田橋落ち、その方段々地われより砂だべふきだし、陣屋道にてだへふき上げめずらしき事大変なり。

南海地震が記載されている図書等一覧

（昭和南海地震）

1. 自治体史
 - 岡山県史第13巻現代I（昭和59年刊）
 - 岡山市史戦災復興編（昭和35年刊）
 - 西大寺市史（昭和55年刊）
 - 改訂邑久郡史下巻（昭和29年刊）
 - 幸島新田開拓三百年記念誌（昭和60年刊）
 - 三幡村誌（昭和57年刊）
 - 沖田村誌（昭和50年刊）
 - 操陽村史（昭和62年刊）
 - 幡多二千年の歩み（平成8年刊）
 - わたしたちのふるさと九幡（平成6年刊）
 - 岡山市浦安町史（昭和46年刊）
 - 興除村史（昭和46年刊）
 - 藤田村史（昭和52年刊）
 - 改訂茶屋町史（平成元年刊）
 - 児島湖発達史（昭和47年刊）

2. 公文書等

- 昭和21年12月21日地震調査記録：岡山測候所＝岡山地方気象台蔵
- 昭和21年12月21日南海道大地震調査概報：中央気象台＝岡山県総務部危機管理課蔵
- 芳田村記録（地盤沈下農地復旧促進全国連盟大会の決議及び岡山縣地盤沈下耕地事業期成会会員名簿）その他三幡村、沖田村等の災害復旧資料＝岡山市立中央図書館蔵

（安政南海地震）

1. 自治体史

- 岡山県史第22巻備中家わけ史料（昭和62年刊）
- 岡山市史第4（昭和13年刊）
- 倉敷市史第5冊（昭和48年刊）
- 和気郡誌（明治42年刊）
- 日生町誌（昭和47年刊）
- 赤磐郡誌（大正元年刊）
- 改訂邑久郡史下巻（昭和29年刊）
- 岡山県御津郡誌（大正12年刊）

- 今村史（昭和30年刊）
- 牛窓町史通史編（平成13年刊）
- 改訂茶屋町史（平成元年刊）
- 福濱村誌（昭和2年刊）
- 興除村史（昭和46年刊）
- 都窪郡誌（大正12年刊）
- 浅口郡誌（大正14年刊）
- 小田郡誌下巻（昭和16年刊）
- 岡山県児島郡誌（大正4年刊）
- 城下町おかやま（昭和49年刊）

2. 古文書

- 池田家文庫＝岡山大学附属図書館蔵
- 国富家文書＝岡山市立中央図書館蔵
- 長瀬家文書＝岡山大学附属図書館蔵
- 荻野家文書（御用記録）＝同上
- 犬養家資料＝岡山県立記録資料館蔵
- 野崎家文書＝財竜王会館蔵
- 日笠家文書＝岡山大学附属図書館蔵
- 町奉行御用日記＝津山郷土博物館蔵
- 地方郡代御用日記＝同上
- *上記文書の地震記録は、東京大学地震研究所編「新収日本地震史料第五巻別巻五ノ二」（昭和62年刊）に収録
- 藤原家文書＝岡山市立中央図書館蔵
- 花房家文書＝赤磐市山陽郷土資料館蔵

3. 論文等

- 西日本における安政南海地震（嘉永七年十一月五日）の地理学的研究（その1）：芳賀修著（就実論叢第21号）
- 岡山県南域における「安政南海地震」の被害について：芳賀修著（吉備地方文化研究第5号）
- 大津屋安兵衛 大地震大変控：清水友美著（笠岡史談第23号）
- 安政南海大地震と女流歌人：吉崎志保子著（書簡研究第2号）
- 安政の大地震の記録：平島晋著（東備第2巻、古文書通信第25号）